

# 岐部神父の

## 召命



トロ岐部カスイ『五野井隆史著、H・チースリク監修（大分県先哲叢書平成9年）』を通して彼の生涯の軌跡を追いつまわりたいと思う。

真に幸せな人  
一人の姉妹の召命の物語を聴き取って、文章にまとめる作業をした。それは、彼女の回想の中に一緒に入り込み、その固有の道程を味わう時間となった。特に、少しづつ全てを捨てることができるようになりつつある自分が、今ここにいて、そうして下さると信じて、死ぬまで、そう思っていたい」という言葉が印象的で、彼女の召命に対する真摯さに心を打たれた。

困難と闘い、乗り越え旅を続けた彼の人生を貫いたものは、何か。それは、一途な信仰と召命への愛である。ローマで司祭となった後、リスボンから7年かかってたどり着いたルバン島から、迫害の嵐吹き荒れる日本へ渡航する直前に書かれた手紙には、「私が最も希望していることは、日本全体がいち早く平和になること（中略）イエス・キリストは、彼にふさわしい花嫁になるように私たちの国を艱難と危険と殉教とによって飾り立てて下さる」（前掲書

274ページ）とある。彼は、その先どんな状況が待ち受けているかを冷静に見極め、現実を希望の内に受けとめ、一歩一歩進もうとする。 遡って、彼がイエズス会入会時に作成した小報告書に、次のように書かれている。「自分の召命に満足しており、また自分の救霊および同胞のそれのために進歩したいという大きな希望を持っている」（前掲書149ページ）。彼自身の中に召命の喜びが充満し、福音の喜びをいのちがけで伝え、群れを育て守り、励ましたいという強い熱意を感じた。幾度も「徒勞と落胆の果てにようやく日本に潜入してから殉教するまでの9年間、東北を中心とした彼

の活動は、まさに、この言葉の実現だった。拷問の最中、同じ穴に吊るされている仲間を励まし続けた彼であった。また、彼は、「神の賜物に關しては数えきれないほど特別に私のために与え給うた」（前掲書149ページ）と書いている。彼の一生は、自分の力に頼るのではなく、ひたむきに神に委ね続けた一生だった。

彼は真に幸せな人だと思ふ。血なまぐさい迫害の過酷な時代に、召命を生き切った真に幸せな人だ。神だけを頼りとする生活に信仰の喜びがあり、真の幸せはそこにあることを彼は私に示してくれる。

鬼束和代  
（いつくしみの聖母会）

# 全国のカトリック女性信徒 別府教会に集う

日カ連顧問司教の山野内倫昭司教様はじめ、加盟している11団体の内8団体、100人の皆様に6月6日、7日にご参加頂きました。基調講演をお引き受け下さいました。森山信三司教様、そして1年間の準備や祈りなどご協力下さった皆様に心より感謝申し上げます。

2023年のテーマは「地球家族のいのちと平和を守るうゝ家庭の中から祈りの声を



山内倫昭司教様の開会あいさつ

と、基調講演もこのテーマにそってお話し頂きました。「我々にかたどり（我々の像に）我々に似せて人を造ろう」「神はこれを見て良しとされた」「人が一人であるのは良くない。彼に（人）に合う助ける者を造ろう」と創

世記を引用され、神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわりによって、人間の生が成り立っている。「いのち」は人間が作りえないもの。人間が「超越」から与えられるもの。戦争や地球規模の不正義や無関心なエゴイズム。私たちがすべきことはシノドスに向けて「シノドスの教会のために交わり、参加、宣教」する共同体を見直すこ

大分から仙台へペナント引き継ぎ

と。聖職者だけでなく、信徒、修道者がともに歩む教会。傷ついた人、共同体に参加できなくなつた人とともに築き上げる。現代社会の叫びに耳を澄ますこととお話しされました。

アシジで行われた世界カトリック女性団体連盟総会に出席した日カ連副会長のジョンソン伸子さんからの報告。カリスジャパン喜代永文子さんからのお話も頂きました。

森山司教様司式の派遣ミサは、山野内司教様、5人の神父様で行われ、最後に日カ連50周年記念総会開催地の仙台にペナントをお渡しし終了しました。主の導きと豊かなお恵みに感謝致します。

東富子（大分教会信徒）

# 司牧企画室の窓から

2023年10月総会に向けてシノドス総会への参加者について、シノドス事務局はすでに、司教以外の者（司祭、助祭、奉獻者、信徒、女性、修道者）に拡大するという教皇フランシスコの決定を報道機関に報告しています。

教協議会、そして、大陸別会議を経て、今、10月4日から29日までの第一回総会に向けて具体的な準備段階に入っています。

教皇はこれまで「世界代表司教会議」と訳され、イベントとして認識されていたシノドスを、そのギリシア語本来の意味、「ともに歩む道」という長いプロセスに変えようとしておられます。全てのキリスト者がともに集い、耳を傾け合つて話し合い、聖霊の識別のうちに進められてきたこの歩みは、各教区、各司

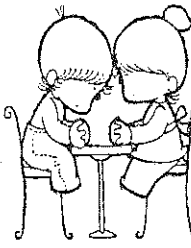
山下敦（司牧企画室）

# 幸せの道

幼稚園の神様のお話で、「ザアカイの回心」をした時のこととです。



# 祈りの小徑



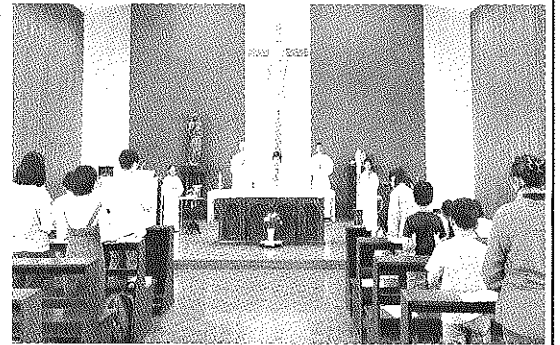
反省をする気持ちや、良いことをしようとする気持ちがあることに気付いたようでした。その祈りに、私は希望に満ちた気持ちになりました。私たちの日常には、戦争や新型コロナウイルスのことなど、恐ろしい話題がたくさんあります。しかし、子どもたちの心の中に「良いことをしようとする」気持ちがあれば、幸せの道を見つかることができます。

エンリケタ・アジャラ（マリア布教修道女会）

# 宮崎 子ども ミツシヨ

最初の子どもミツシヨン 2023年5月14日に、小学4年生の娘、小学1年生の息子と参加しました。

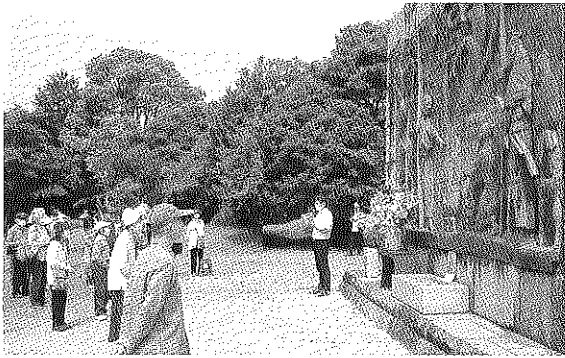
受付の後、オリエンテーリングで田野の農道を2キロほど歩きました。トウモロコシ、タバコ、お茶：真つすぐきれいに植えられた畑の作物を眺めたり、小さな虫や道の真ん中でぺちゃんこになってしまったカニを見つけたり、日に照らされた畑から上る蒸気にびっくりしたり、たくさんの



田野教会でミサに与る子どもたち

新発見を報告し合っているうちに、ゴールの田野教会に着きました。美しい田野の風景、一生懸命歩き楽しそうに話す子どもたちの姿、今思い出した

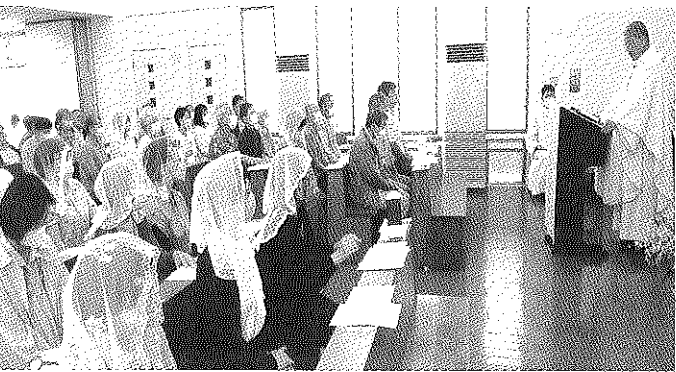
# 葛木祭



キリシタン殉教記念公園の記念碑の前で祈る

久しぶりに大分ブロック合同で「葛木祭」が6月4日(三位一体の主日)に行われた。葛木殉教公園で短い祈りの後、明野教会に移り森山信三司教様司式のミサ。コロナ解禁のためか用意したイスが足りないほど、大勢の参加で

あつた。司教様の「命をかけてま で、守った信仰とは」の投げかけから始められた話は、「コ リント人への手紙の中にある『わたしはまず最も大切なこ ととしてあなた方に伝えたの は、わたしも受け継いだもの です。すなわち、それはキリス トが、聖書に書いてあつたと おりにわたしたちの罪のため に死んでくださったこと、 葬られたこと、また、聖書に 書いてあつたとおりに三日目 に復活したこと、そして、ケ フア(岩)に現れ、次いで 十二人に現れたことです』(一 コリント15・315)であり 継承。小さな共同体での共通 の記憶、弟子たちの記憶、そ してそれは現在私たちの記憶 へと継ぎついでいる」であつた。 当時、葛木は高田地域と呼 ばれていた中の小さな地区に



明野教会で説教する森山信三司教

もかわならず、大勢の信者が いた。それだけに迫害が始ま ると犠牲者を多く出した。 公園の中にある碑を読む と、葛木付近一帯は1661 年から1673年を中心に14 歳から84歳まで約200人の 殉教者を出している。 これらの信仰を一筋に守つ た人たちは「この世的には 葬儀もなく墓もなく、史実や 名前さえも定かでないものが 少なくない」とある。 今日自分を思ったとき「熱 くもなく、冷たくもなく、な まぬるい故に吐き出そう」と いう聖句が浮かび、反省仕切 りの1日となった。 幸松志乃(明野教会信徒)

# マリア様の道 第八回 都城教会

私たちの教会は、今年創立 90周年を迎えます。 教会の扉を開ける と、右側奥に、すて きなマリア様のご像 が私たちを迎えてく れます。 1933年に県下 4番目に創立された 教会は、1945年の空襲に より聖堂を焼失してしまいま したが、その後、紆余曲折を 経て、1950年に新聖堂が 竣工され、現在の素晴らしい



都城教会のマリア様

聖堂が誕生しています。 その頃は、サレジオ修道会 の司祭様方にご指導して頂い ていました。その時、備えら れたのが、扶助者聖母マリア 者聖母マリア様のみ摂理のよ うにも感じます。 祈りに訪れる皆さんがこの マリア像を拝顔されますと、 心の安らぎと安心を感じると 言われます。 私たち も、神の母聖母マリ ア様に倣い、愛徳の 模範となれるよう、 日々の生活の中で祈 りとマリア様との交 わりを行って参りた いものです。 中村かよ (都城教会信徒) ※マリア様の右手の王笏は、 何回もの移動によって失われ ました。

園長 先生のお話 「...見つけ 出すと、喜ん で自分の肩に乗せて、家に帰 り、友人や近所の人々を呼び 集めて言うだろう、『一緒に 喜んで下さい。見失ったわた しの羊を見つけましたから』 (ルカ15・516引用はフ ランシスコ会訳から)。 最近めきめきと鉄棒が上達 している年長のNちゃん。「神 父様見ちよってー」と言いざ ま、軽やかに逆上がり、それ から地球まわり...と連続で決 めてくれます。(いつの間にか 何でもできるようなになっ て。もう手伝うこともそんな に...)と頼もしさと寂しさの 間で揺れていると、とことこ 目の前に来て「肩車して!」 と手を広げて背を向ける、年 少さんの頃と変わらないおね だりの仕方になつて。年長 とはいえ小柄なほうなので、 最近年を感じる私でも彼女の 肩車はそれほど苦になりませ ん。「Nちゃんまだ軽いから、 今のうちに自家の人に肩車い っぱしてもらいよ」と声を かける、「えー、でももう、 お姉ちゃんだもん!」と、ち よつと自己矛盾な発言。する と足元で二歳児クラスのM君 が「かーたーぐーるーまー」と私のズボンを引っ張ってい ます。「交代してあげようか」と声をかけると、「わかつたー!」と気前よく降りてくれ ました。あ、そこはさすが宣言通り「お姉さん」なのね。 99匹を置いて、1匹のため に命を懸けるのが天の御父の み心だと、キリストは語りま した。 私は肩車くらいしかできま せんが、迷子になつても神様 が見つけ出して肩に担いで下 さるといふ温かな感覚を、園 にいる間、子どもたちが少し でも味わってくれば本望で す。 平田直 (高鍋カトリック 聖母幼稚園園長)